

ロボット支援根治的前立腺全摘術後に尿沈渣検査で中皮細胞が認められた1症例

◎赤田 香織¹⁾、石澤 毅士¹⁾、山方 純子¹⁾、荒井 智子¹⁾、横田 浩充¹⁾、松本 一宏²⁾、涌井 昌俊³⁾、松下 弘道³⁾
慶應義塾大学病院 臨床検査科¹⁾、慶應義塾大学医学部 泌尿器科学教室²⁾、慶應義塾大学医学部 臨床検査医学³⁾

【はじめに】ロボット支援根治的前立腺全摘除術(RARP : Robot Assisted Radical Prostatectomy)とは、ロボットを用いて腹腔鏡下で前立腺と精嚢を切除し、膀胱と尿道を吻合させる前立腺癌の根治手術である。開腹術と比較して手術時間や出血量を抑えることが可能である。今回、RARP後の経過観察中に尿沈渣で中皮細胞が認められたことで吻合部離開を示唆する症例を経験したため報告する。

【症例】60歳代 男性

【現病歴】当院泌尿器科に入院、前立腺癌根治療のためRARPを施行した。術後6日で吻合部離開が無いことが確認され、尿道留置カテーテルを抜去した。約1か月後に排尿時痛、腹満感、創部痛が出現して、術後の吻合部離開が疑われたため入院となった。

【入院時検査所見】

1. 生化学検査

TP 7.6 g/dL、Alb 4.2 g/dL、BUN 17.0 mg/dL、Cre 1.30 mg/dL、Na 117.7 mmol/L、K 4.8 mmol/L、Cl 83 mmol/L、eGFR 45 mL/min

2. 尿検査

尿定性 : S.G. 1.019、pH 7.0、Pro(4+1000mg/dL)、Glu(-)、Ket(1+)、Bld(3+)、Uro(±)、Bil(-)、Nit(-)、Leu(1+)、尿沈渣 : RBC(20-29 個/HPF)、WBC(≥50 個/HPF)、扁平上皮細胞(<1 個/HPF)、BAC(1+)、大食細胞(1-4 個/HPF)、中皮細胞(+)

【考察】尿沈渣中に通常認められることのない胸腔や腹腔等の体腔を覆う中皮細胞が検出されたことより、腹腔との交通が考えられた。また、血清Naが117.7 mmol/Lと顕著な低値を示したこと、BUNとCreが術後3日の時点では6.7 mg/dL、0.49 mg/dLであったが、それぞれ17.0 mg/dL、1.3 mg/dLまで上昇していたことから腹腔内に漏出した尿が腹膜を通して再吸収されたことが考えられた。以上からRARP後の吻合部離開が示唆され、膀胱造影により腹腔への交通が確認された。

【結語】尿沈渣検査における中皮細胞の確認はRARP後の吻合部離開の診断に有用である。
連絡先 : 03-3353-1211(内線 62597)